

青藍会会報

第102号

令和5年12月



徳島大学医学部医学科同窓会

日々新

徳島文理大学 徳島文理大学短期大学部
学長 田村 禎通



蔵本キャンパスの小景

撮影 柏木 節子 (医学部35期)

2023年度 青藍会賞募集

青藍会では学術研究の発展と奨励のために
青藍会賞を設けています。

若手研究者の応募をお待ちしています!!



応募締切 2024年1月15日（月）

詳細は26ページをご覧ください

徳島大学医学部創立80周年に母校の歴史を振り返る

青藍会副会長

丹 黒 章 (医学部27期)

徳島大学医学部は今年創立80周年を迎え2024年2月18日に記念式典が開催される予定です。1943年2月、軍医養成のため徳島県立医学専門学校が開校し大阪大学医学部法医学教室初代中田篤郎教授が校長として赴任されます。45年4月には官立に移管され徳島医学専門学校と改称されますが7月4日の徳島大空襲により学舎も附属病院も灰塵と化し、廃校の危機に瀕します。中田篤郎校長をはじめ教職員、学生、県の熱意により存続が決まり陸軍病院のあった蔵本町の歩兵第四十三連隊練兵場に移転します。練兵場は今の蔵本公園や西消防署、加茂名中学校を含む広さで、蔵本駅の長いホームは多くの兵士を中国や南洋に送り出した名残です。陸軍病院は国立徳島病院を経て1953年徳島県立中央病院になります。大学病院と県立病院が隣接する所以です。1948年2月に医専は徳島医科大学に昇格、中田篤郎先生が初代学長に就任されます。今、医学部中庭にある「学者如登山」の碑で中田学長を偲ぶことができます。1949年5月、学芸、医、工（薬学部の前身）3学部を有する国立徳島大学が設置され、1973年新設医大第1号として愛媛大学医学部（開学50周年）が開学するまでの30年間は四国唯一の医学部として、毎年60名の医師を四国だけでなく全国に輩出し、地域医療に貢献してきました。四国の主だった基幹病院が徳大関係病院なのは後輩たちの就職先確保のため奮戦された先輩方のおかげです。

徳大医学部は医学の進歩を担う研究者も多く育ててきました。1961年に医学部附属酵素研究施設（徳大酵素研）が設置され、酵素研には全国から多くの優秀な研究者が集まり国際的にも輝かしい成果を上げてきました。酵素研で活躍された勝沼信彦先生を顕彰する記念ギャラリーが医学部玄関ホールにあり、勝沼奨学金も遺されています。勝沼先生は剣道の達人であり、酵素研からの帰りに武道場でひと汗流したあと校内にあった教授官舎からウイスキーをぶら下げて医学部学生寮を訪れ、寮生と語るのを楽しみにされていました。学生寮は現青藍会館の建つ場所にあり、練兵場の将校宿舎をそのまま利用した建物でしたが1979年に閉鎖になりました。私が最後の寮長で、学生寮の門は今でも

遺っています。

1998年にゲノム機能研究センターが設置され、後に疾患プロテオゲノム研究センターと改称されます。2013年には医学部酵素生理学部門教授を務められた故藤井節郎先生の功績を記念した一般財団法人藤井節郎記念大阪基礎医学研究奨励会からの寄付で「藤井節郎記念医科学センター」が完成します。疾患酵素学研究センター，疾患プロテオゲノム研究センター，この藤井節郎記念医科学センターと糖尿病臨床・研究開発センターがひとつになり先端酵素学研究所が設立されます。蔵本構内にはこの研究施設群と，エフェドリンの発見者である長井長義博士のご家族からの寄付で1990年に完成した長井記念ホール，大塚製薬の寄付による大塚講堂があります。2007年にさだまさし氏の小説が原作の映画「眉山」が公開されました。映画には徳大附属病院の玄関が「徳島市立大学病院」として登場し，大塚講堂での慰霊祭の場面も出てきます。母校の歴史に想いを馳せ皆で80周年を祝いましょう。

目次

○題 字	田 村 禎 通
○写 真	柏 木 節 子
○2023年度青藍会賞募集	
○巻 頭 言	丹 黒 章
○上田夏生先生が香川大学長にご就任	上 田 夏 生 1
○令和5年度青藍会総会（ハイブリッド開催）	3
青藍会会長挨拶	荒 瀬 誠 治 3
医学部長挨拶	西 岡 安 彦 4
議事要録	5
支部報告	6
青藍会会則	10
事業報告	12
会計報告	14
学術講演抄録	岡 田 賢 18
	和 泉 唯 信 19
2022年度青藍会賞選考過程について	久 保 宜 明 23
2022年度青藍会賞受賞講演	和 田 佑 馬 23
○2023年度青藍会賞募集	26
○追悼 加藤逸夫徳島大学名誉教授	露 口 勝 28
	北 川 哲 也 28
	北 市 隆 29
○医学科学生との懇談会を開催しました	31
○第40回青藍会・医学科講演会を開催	田 中 克 哉 32
	谷 川 雅 樹 33
○青藍会の助成活動	
徳島大学病院卒後臨床研修センターの活動報告	岩 田 貴 34
○支 部 だ よ り	
北 海 道 支 部	石 丸 裕 晃 35
東 京 支 部	石 井 保 夫 35
近 畿 支 部	播 村 佳 昭 37
岡 山 支 部	宇 野 昌 明 37
香 川 支 部	福 田 洋 38
	和 田 大 助 39
○特 別 寄 稿	
私の山歩き（山で遭遇した思わぬ事態）	門 田 康 正 41
○会 員 通 信	
名医による理学的所見	渡 辺 罔 武 43
心身医学は全人的医療	板 東 浩 43
外務省医務官としての日々	平 昭 嘉 44
令和5年医学部17期生同窓会の報告	村 澤 正 甫 45
第19期生（四八会）50周年記念同窓会	中 屋 豊 46
卒後48年同窓会「ごじゅうまる会」の開催	足 立 克 仁 47
28会（にっぴちかい）同窓三教授（金山教授，谷教授，鶴尾教授）退官講演会	吉 岡 一 夫 49
40年目の19回は祝賀会も	本 田 壮 一 50
12期生同窓会（徳大41よい会）	池 田 博 行 51

令和5年度徳島大学医学部16期卒業生同窓会 令和5年10月14日(土) 笹乃庄	齋藤 義郎	52
最近, 不思議に思うこと	島 健二	54
俳句	小谷 雄二・零 俊一・駒木 幹正・真鍋 正広	55
○留 学 記		
マインドセットは人それぞれ	大山 拓朗	56
イギリス・ドイツでの留学を通して	堺 重紀	57
ヒューストンで学んだ夏	関 根礼乃	58
タイランパン病院留学記	竹 原 優	59
○第75回西日本医科学生総合体育大会の結果		
第75回西日本医科学生総合体育大会ゴルフ(女子)競技部門 団体優勝		
大工廻 亮・利川 杏菜・岡本 香梨・森田 彩夏・竹内 百佳		60
西日本医科学生総合体育大会を終えて	森田 彩夏	61
第75回西医体を終えて 女子団体戦準優勝	平野 和樹	62
○学 生 だ よ り		
アフターコロナへの転換と学生生活の変化	磯村 勇斗	64
リーグ戦を終えて	山本 燎矢	64
アフターコロナの蔵本祭	阿部 愛美	65
コロナ禍の学生生活を経て	加藤 胡都菜	65
たけのこ連復活への想い	原 風花	67
○青藍会の動き		
教授就任のご挨拶	島原 佑介	68
病院長就任のご挨拶	中野 俊次	69
	近藤 秀治	69
青藍会人事(評議員名簿・支部長名簿・役員名簿・委員会名簿)		70
会員の異動		75
物故者		76
青藍会会費納入状況		77
会費納入のお願い・会費の納入について・振り込みについてのお願い		78
事務局からのお願い		79
○投 稿 規 定		80
○編 集 後 記	工藤 美千代	81

★支部総会開催のお知らせ

各支部会員の先生方は奮ってご参加ください。

岡山支部総会 令和6年2月17日(土) 19時 ホテルグランヴィア岡山にて
連絡先: muno@med.kawasaki-m.ac.jp

広島支部総会 令和6年1月13日(土) 18時 リーガロイヤル広島にて
連絡先: j-hamawaki@hamawaki.or.jp

今号より「支部総会開催のお知らせ」を掲載することといたしました。
支部総会開催のお日にちが確定しましたら青藍会事務局までお知らせください。

上田夏生先生が香川大学長にご就任

香川大学長就任ご挨拶



日頃より青藍会会員の諸先生方には大変お世話になりありがとうございます。私は令和5年10月1日より国立大学法人香川大学長を拝命することになりましたので、一言ご挨拶申し上げます。

私は徳島大学医学部医学科の第29期卒業生です。在学中から生化学に興味を持ち、当時の生化学講座教授の山本尚三先生に誘われるままに研究室に出入りし、実験をさせてもらったり、学会発表を経験させてもらったりしました。卒業後はそのまま大学院に進学し、生化学の研究を本格的に始めました。手先が器用だったわけでもなく、研究者としてやっていける自信があったわけでもありませんが、とにかく実験に没頭する日々を過ごしました。屠畜場に行ってブタの血液を大量にもらい、遠心機をブンブン回して白血球を集め、そこから5-リポキシゲナーゼという酵素を精製するなど、今にして思えば当時の生化学研究は体力勝負でした。大学院修了後は山本先生のご配慮で生化学講座の助手にして頂き、その後、幸運にも恵まれ、講師、助教授と昇進しました。

大きな転機は2001年（平成13年）1月1日、すなわち21世紀の最初の日に訪れ、香川医科大学生化学講座に教授として着任しました。青藍会の先輩である市川佳幸先生（第8期、故人）の後任でしたが、同大学は設立に至る経緯もあって、隣県にありながら徳島大学の

香川大学長

上 田 夏 生（医学部29期）

影は薄く、当時私は唯一の徳島大学医学部出身教授でした。希望とともに不安がいっぱいの門出でしたが、その後、学内の多くの先生方に親しくして頂き、また講座に優秀な若手研究者が集まり、生理活性脂質である*N*-アシルエタノールアミンの代謝に関していくつもの重要な知見が得られ、充実した教員生活を過ごすことができました。大学の方は、2003年10月に政府の方針に従って旧香川大学と統合して香川大学医学部に変わりました。私はやがて学部の管理運営にも携わるようになり、2017年10月から2期4年間にわたり医学部長を務めました。この間に、国立大学医学部で初めての心理職養成学科となる「臨床心理学科」の設置に貢献できたことは大きな喜びです。そして、このたび、多くの先生方から推薦を頂き、笈善行学長（京大卒、前泌尿器科学教授）の後任として学長に選出されました。

香川大学は香川県唯一の国立大学であり、教育学部・法学部・経済学部・医学部・創造工学部・農学部の6学部と、専門職大学院の地域マネジメント研究科等からなります。昨今、地方大学は地域貢献を強く求められていますが、本学は文系・理系の学部等がバランスよく揃っている強みを活かして地域のさまざまな課題解決に協力しており、さらに発展させたいと思います。また、「連携教職課程」など、四国の国立大学が連携して取り組む事業も増えており、徳島大学との良好な関係はますます重要になっています。

青藍会会員の先生方には今後とも御指導御鞭撻賜りたく、引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。

略 歴

昭和58年（1983年）3月	徳島大学医学部医学科卒業
昭和62年（1987年）3月	徳島大学大学院医学研究科（博士課程）修了
昭和62年（1987年）4月	徳島大学医学部附属病院医員
昭和62年（1987年）7月	徳島大学助手医学部（生化学講座）
昭和63年（1988年）5月	徳島大学講師医学部（生化学講座）
平成3年（1991年）4月	米国テキサス大学サウスウエスタン医学センター ダラス校研究員（～平成5年8月）
平成6年（1994年）12月	徳島大学助教授医学部（生化学講座）
平成13年（2001年）1月	香川医科大学教授医学部（生化学講座）
平成15年（2003年）10月	香川大学教授医学部（生体分子医学講座生化学）
平成29年（2017年）10月	香川大学医学部長（併任）（～令和3年9月）
令和3年（2021年）10月	香川大学副理事（併任）（～令和5年9月）
令和5年（2023年）10月	香川大学学長

（現在に至る）

令和5年度青藍会総会（ハイブリッド開催）

令和5年度青藍会総会は、昨年に引き続きハイブリッド開催といたしました。総会当日の内容をご報告申し上げます。

I 開会宣言

副会長

大 申 文 隆（医学部24期）

ただいまから令和5年度青藍会総会を開催いたします。なお、本会は評議員会及び支部長会議もかねております。開会に当たりまして荒瀬会長からご挨拶を申し上げます。

II 会長挨拶

青藍会会長

荒 瀬 誠 治（医学部20期）

おはようございます。本日は総会に参加いただきありがとうございます。今回も青藍会館での直接参加と各地からのリモート参加のハイブリッド形式の総会になりました。皆様方と直接お会いできないのは残念な一方で、今まで距離的・時間的な制約で総会に参加できなかった評議員、会員の皆様方がリモートで参加されるようにもなり嬉しく思います。青藍会のためにも、各種ご意見をいただきたく存じます。会長となり早3年、この間の青藍会の動きで変わったもの、変えた物、変わらずに続けた物、およびその結果等の報告です。

本会の財政状態は、コロナ前にほぼ立ち直りを見

せ、3年前には青藍会設立の趣旨に則っての行動が普通にできる状況になりました。ところがその頃からのコロナ流行であらゆる状況が一変し、大学では入学式、オリエンテーション、卒業式、謝恩会等もなくなり（勝手に卒業？）、講義はもとよりほとんどが画面とスピーカー相手のリモートとなり、本来なら学生同士、学生・諸先生方・先輩諸氏が集まるfieldsで人と相対する交流がなくなりました。患者さんと相対して初めて成立する臨床実習はどうなったのでしょうか。リモート？クラブ活動そのものも活動停止を余儀なくされました。このような中では同窓仲間を慈しみ、恩師への感謝、医学部で過ごした充実感等が醸成されるようにみえません。old ageが少しは感じた同窓仲間、クラブ仲間、先輩、先生方や恩師への思い等はどこかに霧散し、思い出浅き学生生活になったのではと本当に心配しています。

青藍会も学生に相対する機会を失い、青藍会の姿を直接に伝え、同窓会のあり方等に賛同を得る機会がなくなりました。放置すれば青藍会の存在すら忘れられると思い、学生らが一堂に会する機会（卒後研修部所説明会、国家試験の説明日）を捉えて、青藍会の趣旨内容を伝えると共に、卒業時の会費納入他のお願いをしてきましたが、残念なことに会費納入率がコロナ前の30%弱に低下したのが現状です。それよりも大学医学部ひいては青藍会に何の思い入れもなく、青藍会と連絡すら取らない会員が増えたことが衝撃でした。

青藍会を認識していただき将来のactiveな会員を生み出すために、白衣授与、手術衣授与、学生時代に基礎教室で業績を残した学生への青藍会奨励賞、MD-PhDコース学生への奨励金・資金援助、海外留学支援等の学生支援、研究者支援等をしてきましたが、これらの行為が学生や若手会員にどのように伝わっているか？です。ただうれしいことは、会員の研究業績をたたえ顕彰する「青藍会賞（賞金100万円）」が研究者の榮譽・実績につながると若手会員に認識されるようになり、過去の青藍会賞受賞者から徳大医学部で3名、他大学医学部で1名の教授が誕生しました。加えて受賞者の皆様がactiveな青藍会会員となり、全てを次代に伝えようとしてくれた事も心弾むうれしい結果でした。また、青藍会主催の講演会が再開されました。今年は学生と青



荒瀬誠治会長挨拶

令和5年度青藍会総会（ハイブリッド開催）

また、医学科として大変うれしいニュースを2つご報告させていただきます。いずれも過去に例のない快挙と言えるかもしれません。一つ目は2023年度の医師国家試験の現役合格率が100%だったことです。もちろん全国の国立大学の中でトップです。二つ目は、医学部29期卒で香川大学医学部生体分子医学講座生化学の上田夏生教授が10月から香川大学の学長に就任されることです。青藍会として大変誇らしい快挙であり、上田先生のこれまでの香川大学でのご活躍に敬意を表しますと共に心よりお祝い申し上げます。

昨年度には教育・研究の学外・国際交流に関連したいくつかの新しい活動も始めることができました。令和5年3月13日に社会医学実習を始めとする医学教育に関連して岐阜県の高山市と連携協定を締結いたしました。また、医学部23期卒の濱本恒男先生のご寄付により「濱本医学国際交流基金」を設立し、令和5年度から海外からの留学生2名と、徳島大学から海外研究留学を目指す先生1名に奨学金を支給する制度を開始しました。さらに、故香川征元学長からのご寄付による「香川奨励賞」を設立し、臨床研究で成果を挙げられた先生を表彰させていただく予定です。

改めまして青藍会の先生方の日頃のご支援に感謝いたしますと共に、80周年記念事業へのご協力を衷心よりお願い申し上げます、医学部長の挨拶とさせていただきます。

IV 議事要録

- 1 日時 令和5年7月17日(月) 10:30~16:00
- 2 場所 ハイブリッド開催（青藍会大会議室）
- 3 出席者 50名（会場36名・リモート14名）
- 4 議題

(1) 青藍会会員の現状報告

大串副会長から青藍会会員の現状報告があり、黙祷が行われた。

正会員数5,859名（総会員数6,755名、物故会員数896名）教授就任3名、病院長就任2名、青藍会出身教授92名

(2) 青藍会会則の改正（案）

小西事務長から、会則第3条、第4条、第5条及び第20条の改正案について説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。（10頁）

(3) 令和4年度青藍会事業報告（12頁）

- (4) 令和4年度青藍会収支決算報告（案）
審議の結果、原案のとおり承認された。（14頁）
- (5) 令和4年度医学部50周年記念事業募金会計決算報告（案）
審議の結果、原案のとおり承認された。
- (6) 令和4年度青藍会館運営費収支決算報告（案）
審議の結果、原案のとおり承認された。（16頁）
- (7) 令和4年度監査報告（14頁・16頁）
- (8) 令和5年度青藍会事業計画（案）
審議の結果、原案のとおり承認された。（13頁）
- (9) 令和5年度青藍会収支予算（案）
審議の結果、原案のとおり承認された。（15頁）
- (10) 令和5年度青藍会館運営費収支予算（案）
審議の結果、原案のとおり承認された。（17頁）
- (11) 名誉会員の推薦について
荒瀬会長から、平成16年に徳島大学大学院HBS研究部予防医学分野教授に就任され令和5年3月末に退任された有澤孝吉先生について、長年、教育・研究・診療において徳島大学及び青藍会に貢献されたので、名誉会員に推薦したいとの提案説明があり、審議の結果、承認された。
- (12) 医学部創立80周年記念事業への協力について
荒瀬会長から、今年度、医学部が創立80周年記念事業を進めていることに伴い、青藍会として協力したい旨説明があり、その後西岡医学部長より詳細について説明がなされた。また、青藍会が保持している個人情報について今回の事業に関して医学部と共有する旨説明があり、審議の結果、80周年記念事業への協力について承認された。
- (13) その他
塩田洋先生（医学部14期）より、青藍会の活動を活発にするため各期評議員を任期制にするのはどうかとの意見があった。荒瀬会長から評議員を各期2名と固定せず増やすという考えもあるとのこと、また小川達司先生（医学部31期兵庫支部長）より、評議員にアンケートを取り意見を出してもらうのはどうかとの意見があがり、今後検討することとした。更に、太田房雄評議員（医学部13期）より、若い人を繋いでいるのはSNSであり、青藍会でも整備すべきではとの意見があった。

近畿支部

近畿支部長
播村佳昭（医学部28期）

COVID19で3年にわたり、ハイブリッド形式を交えて、総会が開催されることは、荒瀬会長以下、役員の方先生方ならびに事務局の皆様方大変なご苦勞のたまもの、と感謝申し上げます。かたや当支部は「休眠状態」でありまして、令和2年からマウンドに上がったものの、支部報告も三連続で「申告敬遠」でした。このまま押し出し、自責点1で投手交代かと懸念しておりました。おかげさまで、この8月5日、荒瀬会長の臨席を賜り、支部総会を予定していることをご報告申し上げます。記念講演は加藤真介名誉教授に快諾いただきました。

近畿支部では、総会に出張した支部長が、その報告を兼ねて比較的直後に支部総会を開催するのが慣例であります。以前は2月でしたが、海の日直近ということで8月上旬となりました。初めての夏期開催ですので勝手が異なります。当日は「淀川花火大会」で混雑を極めることを失念していました。総会会場も淀川の至近距離というおまけ付きです。その前の週は「天神さん」で似たような案配です。

それにしましても足かけ4年のブランクは実に長く、総会の前に役員会を行うものの、世代交代を求められて十分に参集できませんでした。顛末を青藍会報に続報させていただきます。



兵庫支部

兵庫支部長
小川達司（医学部31期）

7月17日海の日に青藍会本部会館で総会に出席し、支部報告をいたしました。4月より楢林（11期）先生から小川（31期）に支部長を引き継ぎ、世話人が大幅に変更になりました。副支部長3名松田（32期）、井川（34期）、篠原（35期）、会計 紀平（31期）、監事 竹田（22期）、置塩（22期）、幹事 鷲尾（36期）、世話人 北野（29期）、松井（31期）、大西（35期）、越智（38期）、上村（38期）、名誉支部長楢林の各先生に引き受けていただきました。40期以降の先生方にも今後参加いただく予定です。6月25日に世話人会を三宮「第一樓」で行い、10名の参加がありました。写真では大役を果たされた楢林先生の和やかな表情と対照的に小生の緊張感あふれる表情がでています。その会で今後、兵庫支部会の継続のため「分散」と「協力」をキーワードに役割分担をすすめていく事、連絡を葉書からメールに移行していく事、会場を姫路→尼崎→神戸と巡回する事、会計を分ける事等話しました。今年の支部総会は11月5日（日）12時～15時、ホテル日航姫路で会費1万円。卒後5年まで65期～69期の先生は無料ですので奮って参加ください。



兵庫支部世話人会 令和5年6月25日 於 第一樓

学術講演抄録

ウイルスと戦う宿主免疫

広島大学大学院医系科学研究科小児科学
教授 岡田 賢（医学部45期）

宿主免疫は、病原体の構成成分を認識して迅速に反応する『自然免疫』と、学習により再感染時に効果的な免疫応答を発揮する『獲得免疫』の2つに大別される。前者は好中球やマクロファージなどの食細胞が、後者はT細胞やB細胞のようなリンパ球が主たる担当細胞であり、樹状細胞が両者の橋渡しを担う。宿主免疫は、自己と非自己を適切に識別した上での生体反応を促すため、複雑なシステムを構築している。この複雑な免疫機構の歯車が狂うと、先天性免疫異常症（IEI: Inborn Error of Immunity）、自己免疫疾患、悪性腫瘍など様々な疾患が発症する。講演では、演者らが長年取り組んできたIEI研究に基づき、SARS-CoV-2を中心としたウイルスに対する宿主免疫を紹介する。

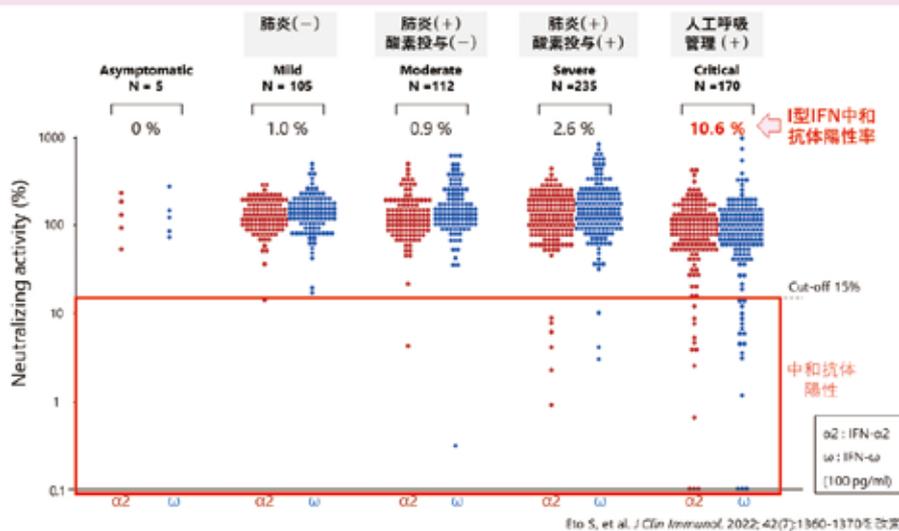
IEIは、遺伝的な要因により免疫系が障害されている疾患の総称で、患者は様々な病原体に対して易感染性を示す。IEIは1万人に1人程度の稀少疾患であり、日常診療で遭遇する頻度は必ずしも高くはない。しかし、重篤な感染症により治療困難な感染巣や臓器障害を残すこともあることから、早期に適切な診断がなされることが望ましい。本症を適切に

診断するための第一ステップは『IEIを疑う』ことであり、IEIを疑う10の徴候（http://pidj.rcai.riken.jp/10warning_signsJ_110107.pdf）が参考になる。

2020年にパンデミックをきたし、国際的な脅威であるCOVID-19の重症化にも宿主免疫が関与する。COVID-19重症化の最大のリスク因子は『年齢』であり、高血圧、糖尿病、肥満などの基礎疾患もリスク因子となる。演者らは、CHGE（COVID Human Genetic Effort: <https://www.covidhge.com/>）を介した国際共同研究に取り組み、既知のリスク因子を持たないにも関わらず重症化したCOVID-19患者の解析を行っている。CHGEはI型インターフェロン（IFN）に着目して、宿主免疫の異常とCOVID-19重症化との関連性を検討している。CHGEを介した代表的な研究成果として、1）COVID-19最重症例のうち約5%程度で、TLR3、IRF7、TLR7などのI型インターフェロン（IFN）に関連する遺伝子異常が同定されること（Zhang Q, et al. *Science*, 2020）（Asano T, et al. *Sci Immunol.*, 2021）、2）I型IFNに対する中和抗体がCOVID-19重症化の重要な因子となりうること（Bastard P, et al. *Science*, 2020）（Bastard P, et al. *Sci Immunol.*, 2020）、などを発見してきた。本邦においても、COVID-19患者のなかでもICU管理が必要となる最重症例の約10%がI型IFN中和抗体を保有すること（図: Eto S, et al. *J Clin Immunol.*, 2022）、健常者の約0.7%が同中和抗体を保有すること（未報告データ）などが判明しており、COVID-19重症化リスクを議論する上で重要な知見となっている。さらに近年、I型

IFN中和抗体がインフルエンザ肺炎やウエストナイル熱の重症化にも関与することが明らかとなっている（Zhang Q, et al. *J Exp Med.*, 2022）（Gervais A, et al. *J Exp Med.*, 2023）。I型IFN中和抗体は、他のウイルス感染症の重症化にも関与すると予想され、同中和抗体の臨床的意義の解明や、簡便な測定法の開発・普及が今後の課題と言える。

本邦におけるCOVID-19患者のI型IFN中和抗体の保有状況



縁

徳島大学大学院医歯薬学研究所臨床神経科学分野
教授 和 泉 唯 信（医学部41期）

私は広島県三次市にある浄土真宗寺院の長男として生まれました。高校卒業後は一浪の末北海道大学理I系（最終的には理学部数学科）に入学。卒業後医師となるべく徳島大学医学部を受験・入学します。その後脳神経内科に進み現在に至ります。わずか数行で表すことのできる人生ですが振り返ってみますと、その節目節目で大切な縁がありました。ひとつひとつの縁が縦糸や横糸となり、気がつけば不思議な模様を織りなしていることに気が付きます。そのいくつかを振り返ってみます。

ひとつめの縁は、やはり「柔道」です。私が北海道大学入学後に出会った柔道は、寝技中心の高専柔道といわれる異色のものでした。先輩達も個性的な人が多くこれまでの先入観が壊されていく場面を度々経験しました。北大柔道部の最大の目標は年に1回開催される七帝戦です。15人制の団体戦で1試合の時間は2時間を超える総力戦です。私は留年までして計5年在籍し主将もつとめました。一度も勝利することなく最下位にずっと甘んじました（図1）。以上のいきさつは柔道部の後輩で新聞記者を経て作家になった増田俊也氏が「七帝柔道記」で詳しく書いてくれていますので興味のある方は是非ご一読ください。北大柔道部からももらったものはいくつかあります。「負けること。負けを知ること」、「既成概念を捨てる」、「垣根を越えて取り入れる」、「限りある時間で一生懸命頑張る」、「つなぐこと」です。これらは形を変えて現在取り組んでいる難病である筋萎縮性側索硬化症（ALS）の診療、治療法開発に活かされています。



図1：北海道大学柔道部時代

北大卒業後は就職になる準備に入るはずだったのですが、そうではなく徳島大学医学部に入学することになります。就職である父の希望でした。父は、1972年（昭和47年）に地域が洪水で被災したのを契機に社会福祉をやりたいと思い立ち、苦労して養護老人ホーム、次いで特別養護老人ホームなどを設立しました。私も漠然と将来は就職と福祉施設の仕事をするんだろうなと思っていました。ところが私が北大4年目の時に父は脳出血を起こし、それを契機に病院設立を思い立ちました。多くの入所者が病を得て住み慣れた施設を去っていく現実を目にした父は、最後まで安心して過ごせる病院の必要性を感じていたのです。そして私に医師になることを求めました。「葬式だけをする僧侶になるな。生きて苦しんでいる人に教える僧侶になれ。病んで苦しんでいる人に接する医者になれ。」と涙をこぼして説きました。その言葉に押され医学部受験を決意したのです。とは言え北大で柔道ばかりしていた私に医学部受験はとてつらいものでした。当時の共通一次テスト初日がかつて得意だった数学も全くできませんでした。この年の合格を早々に諦めた自分は2日目を前に居酒屋に繰り出しました。そこで柔道部の後輩に会い、初めて後輩に説教されました。「諦めるんですか!？」それで逃げるのはやめてダメ元で2日目も受験すると意外にもまずまずの出来でした。夢を託したのは徳島大学です。1989年（平成元年）の徳島大学医学部は定員の20%は二次試験の比率が1：5でありそこに賭けたのです。幸運にも二次試験はほぼ出来て浪人生活を重ねることなく入学することができました（図2）。これも大きな縁でしょう。



図2：徳島大学医学部の合格通知



図5：2001年4月徳島大学脳神経内科発足時
右端が梶龍児教授。左から2番目が著者。

私は母校に戻りました（図5）。最初の会議で梶教授から「ALSの治療研究をしないか」と提案されALSとの縁がそこから始まりました。徳島大学での勤務は充実していました。しかし2006年（平成18年）8月に不摂生がたまって小脳梗塞を発症、約2か月の入院を要しました。この入院中に「先のわからないこの身体だが、一つでも納得のできる仕事をしよう」と決意し、改めてALSを仕事の中心にすることにしました。翌年に名古屋大学が主幹で開始されたALS患者レジストリー（JaCALS）に徳島大学も参加しALSにより注力できる環境が整いました。脳梗塞発症を契機に私は大学を非常勤になり、父が開設した病院の理事長に就任しました。大学も非常勤で継続して勤務しておりJaCALSの登録も順調に進んでいきました。中には治療を求めて本当に遠くから受診された方もいます。大学を非常勤になって時間を見つけては私の方から遠方の患者さんの所に赴く事もしました。患者さんの辿られた道を追体験することで、「この遠い距離をどんな気持ちで通われたのだろう」「良い治療を期待され、不自由な身体をおして時間をかけてでも来られたのだろう」と患者さんの切実な思いを体感しました。これらの経験を通して、「患者さんと医者はまったく対等」という心からの実感が私の中に根付いていきました。この実感こそ、患者さんからいただいた大切な縁だと思っています。

実家の病院は10年間勤めました。その頃退官を控えた梶先生から「もう一度大学で治療開発をしよう」とお声がけを頂きました。私自身も多くのALS患者を診察する過程でやはり治療法を開発したいという思いが年々大きくなっていました。実家

の住職を従弟が代行し、医療法人理事長は東北大学を早期退職した義弟が就任するという巡り合わせにより、2018年4月に徳島大学に戻りました。

ALSは上位および下位運動ニューロンの変性により全身の筋萎縮・筋力低下をきたし、舌や喉頭筋の障害による球麻痺（構音障害、嚥下障害）、呼吸筋麻痺による呼吸障害を生じます。発症から人工呼吸器装着あるいは死亡までの期間は20-48か月とされる難病です。徳島大学ではTokushima ALS Researchとして自然歴、神経生理、MRI、超音波、液性バイオマーカー、遺伝子、神経病理、iPS細胞などの研究を行い治療法開発につとめています。

遺伝子研究では、広島大学との共同研究により常染色体潜性遺伝の可能性のあるALS家系にホモ接合体マッピングを実施し原因遺伝子 *optineurin* を同定しました（Nature 2010）。その論文の第二著者は現在徳島大学遺伝情報学の森野豊之教授です。森野先生との縁は長く、私の最初の指導医であり、大学院の時の1学年先輩であり、今に至るまでご指導をいただいています（図6）。

ALSの保険適用薬としてリルゾールとエダラボンがあります。リルゾールは生存期間を2-3か月改善するものの経過中の症状改善を認めません。エダラボンは経過中のALS機能評価スケール改訂版（ALS Functional Rating Scale Revised: ALSFRS-R）の改善を認めますが、生存期間への影響は不明で、現在市販後調査によって検証中です。このように既存薬の有効性が十分でないため世界中で新規治療薬の開発が進められています。我々は長年メチルコバラミン（活性型ビタミンB12）のALSに対する効果を検証してきました。メチルコ



図6：前列右の森野豊之教授（遺伝情報学）は著者の最初の指導医

2022年度青藍会賞の授与及び受賞講演

2022年度青藍会賞選考過程について

役員会学術委員

久保宜明（医学部34期）

第30回2022年度青藍会賞の選考委員会は、令和5年2月15日に開催しました。今回は3名の応募があり、青藍会から事前に依頼しました6名の選考委員の先生方に書面審査をお願いし、その結果に基づいて選考委員による合議審査が行われました。なお、今回の選考委員長には委員間の互選により安倍正博委員が選出されました。

応募者3名は、いずれも優れた研究業績をあげておられるという評価でしたが、徳島大学における包括的な研究内容、インパクトファクターの高い論文発表、論文数の量、および今後の研究の発展性等、総合的な観点から選考がなされ、全員一致で以下の1名を青藍会賞の受賞対象者として選考いたしました。

受賞者

和田佑馬氏（医学部56期）

徳島大学病院（消化器・移植外科）特任助教



令和5年度青藍会総会にて

来年も引き続き積極的な応募をよろしくお願いいたします。

「消化器癌に対する診断精度向上と再発転移の予測—バイオインフォマティクス解析と国際多施設共同研究によるバイオマーカー研究—」

徳島大学病院外科（消化器・移植外科）特任助教

和田佑馬（医学部56期）

はじめに

この度は、大変栄誉ある青藍会賞をいただき、誠にありがとうございます。青藍会会長である荒瀬誠治先生をはじめ、選考委員の先生方、青藍会の皆様には厚く御礼申し上げます。昨年の齋藤裕先生に続き、消化器移植外科から2年連続で選考頂き、大変嬉しく思います。



バイオマーカー研究

バイオマーカー研究の変遷になりますが、以前より手術検体や生検材料といった組織を用いて、DNA や miRNA, DNA mutation, メチレーションなどの研究が行われてきました。しかし、組織が採取できない症例や、組織量が少ない症例などの問題があり、より簡便で侵襲が少ないリキッドバイオプシーが注目されています。リキッドバイオプシーは、患者の血液などを採取して、その中に含まれている循環腫瘍細胞や DNA, RNA を用いてゲノム解析を行う検査であり、複数回の採取が可能であることから、治療前後の効果予測などが可能です。さらに近年、リキッドバイオプシーの中でも、癌細胞から分泌される、より安定したエクソソームも着目され、様々な分野で研究されております（図1）。

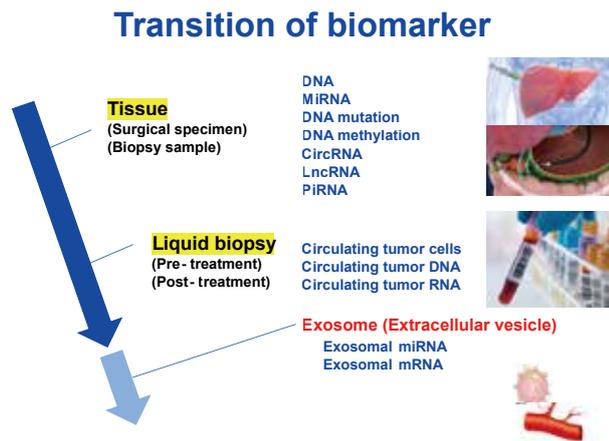


図1

バイオインフォマティクス解析と国際多施設共同研究

最初に、包括的な遺伝子情報が含まれている public dataset である TCGA や GEO, もしくはシーケンスの情報から特徴的な分子を同定していきます。そして、目的に合わせた解析で候補の分子を絞り込んでいき、複数の分子を組み合わせる式を作成します。次に、臨床検体を用いて RealtimePCR 法で training set と validation set で検証を行い、最終的に、臨床で重要な因子と候補の分子を組み合わせ、リスクモデルを作成し、診断や再発、治療効果予測などを検証します（図2）。臨床検体では、

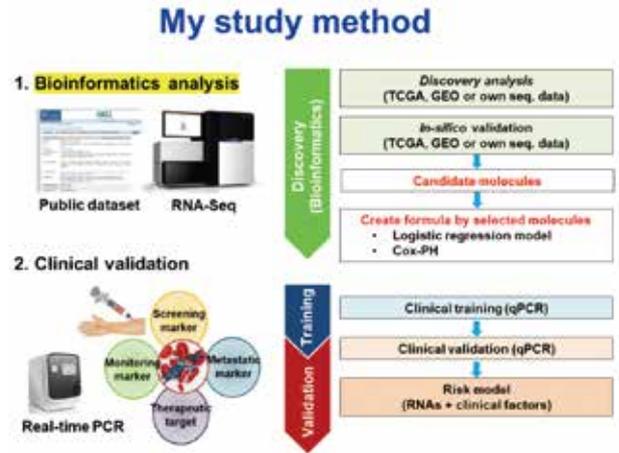


図2

国際多施設共同研究として、欧米ではアメリカやスペイン、イタリアなど、アジアでは日本、韓国、台湾など様々な国の研究機関と提携し、日本では徳島大学をはじめ、北は北海道大学、南は熊本大学まで多くの施設から臨床検体を頂き、徳島大学を中心としたバイオマーカー研究を行ってきました。

組織検体を用いての肝内胆管癌の再発予測

肝内胆管癌の切除臨床検体を用いて、包括的遺伝子解析を実施し、再発リスクが高い患者を術前に予測可能であることを報告しました。徳島大学、九州大学、熊本大学、米国 City of Hope の多施設共同試験であり、まず、public dataset (TCGA: n=27, GSE107943: n=28) を使用し、肝内胆管癌患者の術後再発に関連する包括的な遺伝子解析から8個の遺伝子を特定しパネルを作成しました。続いて、日本国内の3施設の肝内胆管癌患者の241検体 (Training: n=64, Validation: n=177) を用いて検証し、Training: AUC=0.89, Validation: AUC=0.86 でありました。それら遺伝子パネルと臨床病理学的因子を組み合わせ確立したリスク層別化モデルは、AUC=0.89と良好であり、高リスク患者の85%で再発予測が可能であり、治療戦略を決定するうえで重要な結果でありました（図3）(Wada Y, et al. Hepatology. 2021)。

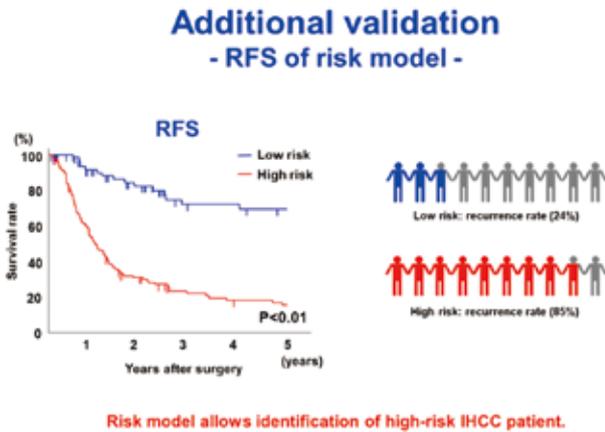


図 3

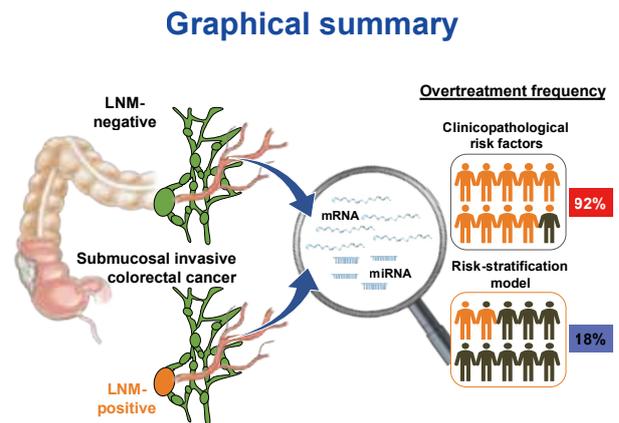


図 4

リキッドバイオプシーによる早期大腸癌におけるリンパ節転移

粘膜下層浸潤大腸癌患者における術前リキッドバイオプシーを利用しリンパ節転移が予測可能であることを報告しました。当研究は徳島大学、国立がん研究センター中央病院、国立がん研究センター東病院、米国 City of Hope 研究所との多施設共同試験です。以前の研究から、リンパ節転移に関連する 4 個の miRNA と 5 個の遺伝子を同定しパネルを作成しました。粘膜下層浸潤大腸癌で根治切除を施行した患者の 188 血漿検体 (Training: n=46, Validation: n=142) を用いて検証し、Training: AUC=0.86, Validation: AUC=0.82 でありました。作成したパネルと現在のガイドラインで使用されるリンパ節転移の臨床病理学的リスク因子を組み合わせ確立したリスク層別化モデルは、AUC=0.90 でありました。現在、使用されているガイドラインでのリスク因子では 92% で過剰治療されていましたが、確立したリスクモデルを使用すると、18% まで抑制する事が可能であり、大腸癌治療における現在の治療ガイドラインを改変する可能性があります (図 4)。本研究は、Gastroenterology 161 巻の表紙に掲

載され、Editorial に取り上げられました (*Wada Y, et al. Gastroenterology. 2021*)。

今後の展望

今後の展望ですが、リキッドバイオプシーには血液以外にも腹水や尿、便などがありますが、リキッドバイオプシーを用いる事でスクリーニングや診断、術後の再発や治療の効果予測、治療後のモニタリングまで予測できる事が可能です。また今回、国際多施設共同研究として多くの研究機関、先生方から協力頂き、共同研究を行って参りましたが、バイオマーカー研究には多施設共同の前向き研究が重要ですので、徳島大学からバイオマーカー研究をさらに発展させていきたいと思ひます。

最後に

最後になりますが、このような貴重な研究経験を与えてくださり、御指導賜りました島田光生教授、消化器移植外科教室の先生方、実験助手の皆様、ならびに、共同研究者として御協力賜りました先生方にこの場を借りて深く感謝申し上げます。

青藍会賞募集

2023年度青藍会賞募集

2023年度青藍会賞を下記のとおり募集します。

本賞は青藍会会員による学術研究の発展と奨励のために、若手研究者の優れた業績に対して授与するものです。奮ってご応募下さい。

1. 応募資格

2023年12月末現在で42才未満の青藍会正会員
但し、2023年度までの会費完納入者であること。

2. 審査対象

2019年1月から2023年12月までの研究業績を対象とします。
なお、選考では徳島大学で主として行われた研究であることを重視します。

3. 応募締切

2024年1月15日（月）（応募締切り後は提出書類の変更を認めません）

4. 応募手続

以下の書類を青藍会事務局へ提出して下さい。（原本とそのコピー10部をご用意下さい）

1. 申請書（別紙様式1）
2. 履歴書（略歴）（別紙様式2）
3. 主指導者の推薦状（別紙様式3）
4. 原著論文（2019年1月～2023年12月末に発刊された原著論文；通し番号をつけ、年代の近い順に記載し、主たる論文3編には通し番号に○をつけること。主たる論文は筆頭著者の論文に限定しない。応募者には下線をひくこと。）（別紙様式4）
5. 主たる論文3編の要旨；申請者が論文の研究においてどこに寄与したかの記載を含めること。（各400字程度）（別紙様式5）
6. 主たる論文3編の別刷り（コピー可）
7. 競争的資金の獲得状況（2019年1月～2023年12月末までに獲得した研究費の名称、研究期間、研究題目、直接経費の研究費総額。研究代表者の資金に限る。）（2023年12月末時点で採択が決定したものも含む）（別紙様式6）
8. 今後の研究の展望（800字程度）（別紙様式7）

なお、同一推薦人が複数者を推薦する場合は推薦順位をつけること。

申請書等の各様式は青藍会事務局（seiran@tokushima-u.ac.jp）にご請求下さい。

5. 選考

青藍会会長から委嘱された選考委員会が行います。

6. 受賞者数

原則1名

7. 青藍会賞の授与

賞状及び研究助成金100万円の目録を青藍会総会開催日に授与します。
研究助成金は受賞者あてで教室への委任経理金（奨学寄附金）とする。

8. 受賞講演

青藍会総会開催日当日、受賞講演を行っていただきます。（30分程度）

お問合せ先 青藍会事務局 TEL 088-633-7109（内線2601）
seiran@tokushima-u.ac.jp

医学科学生との懇談会を開催しました

コロナ禍は3年もの長期に亘り、青藍会が学生たちと関わる機会が減少したことにより、青藍会の存在や意義を理解してもらえないとの危機感を募らせておりました。2023年5月、コロナが5類感染症となったことから学生と直接会う場を設けたいとの強い希望により、各学年総代・副総代にお声掛けし、青藍会正副会長、医学部長、医学科長及び学務課（陪席）にもご参加いただき6月9日（金）に懇談の場を開きました。

当日は、荒瀬誠治青藍会会長、西岡安彦医学部長の挨拶の後、学生からの意見や感想も活発に出され、和やかな時間となりました。

青藍会の懇談に参加して

林 恒太郎（医学科6年総代）

今年度より医学科の現役学生が正会員になるということで、荒瀬会長をはじめとする役員の方々とお話しできる貴重な機会をいただきありがとうございました。今後も70期生の代表として、役員の方々の橋渡しに尽力したいと思います。

福田 翔一（医学科5年総代）

今回の懇談で、荒瀬先生など青藍会の先生方が後輩である私達にどれくらいの熱意を持って対応されているのかの一端を知り、先生方の想いに答えられるように頑張っていこうと決意をいたしました。今後ともご指導・ご支援のほどお願い申し上げます。

榎本 侑生（医学科4年副総代）

この度は懇談会という貴重な機会を頂きまして有難うございました。私たちの背中を支えて下さる立派な先輩方がいることを感じられたとともに、自分

たちもいつかそうなれるように頑張らなければと思える刺激的な機会でした。

鍛治 尚紀（医学科3年総代）

今回は青藍会の方々との懇談会という貴重な機会を設けていただきありがとうございました。今回の懇談会では、初めて青藍会に所属する、同じ大学を卒業された先輩方に会わせていただいたことで、今までどこか実感のなかった、徳島大学への帰属意識を強く認識することができました。

松本 りか（医学科3年副総代）

貴重なご機会を頂きありがとうございました。直接お話しさせていただいたことで、青藍会の皆様が私達学生に目をかけ、大切に思ってくださっていると知ることができ、ありがたい思いで一杯です。私達学生も青藍会の一員になるにあたり、よりいっそう精進を重ねてまいります。



第40回青藍会・医学科講演会を開催

講演会について

青藍会講演会実行委員会委員長

田中克哉(医学部36期)

令和5年10月20日(金)18時30分より藤井節郎記念ホールにて第40回青藍会・医学科講演会が開催されました。講師には京都大学iPS細胞研究所所長の高橋淳先生とビジョンケア社長の高橋雅代先生ご夫妻をお呼びしました。高橋淳先生は1986年京都大学医学部を卒業し、脳外科医として臨床の道に入られました。1995年から米国ソーク研究所研究員として留学され再生医療の研究をされました。帰国後京都大学に戻られて2012年から京都大学iPS細胞研究所教授、2022年4月より現職にご就任されています。2018年パーキンソン病患者に対するiPS細胞を使った治療を世界で初めて行っています。

高橋雅代先生は淳先生と同級生で京都大学を卒業後眼科医として臨床医として勤務されました。淳先生が米国ソーク研究所ご留学した時に一緒に渡米されましたが、そこで神経幹細胞の存在を知り眼科医である自分には神経幹細胞から網膜の再生ができるはずだと一連の研究が開始されました。2006年京都大学から理化学研究所に移りiPS細胞から網膜色素上皮細胞を作成し加齢黄斑変性病患者を治す治療を目指し、2014年世界で初めて患者に移植しました。2019年理化学研究所を退職されスタートアップ企業であるビジョンケアの社長にご就任されています。座長は呼吸器・膠原病内科学教授の西岡安彦先生(34期)が務められました。当日は多くの教職員、学生、青藍会会員の皆様が県内外よりご出席いただきました。

淳先生のご講演は“治るといえることはどういうことか?”ということから始まりました。プラナリアは自己修復ができるのに人で再生能力が起こっているのは皮膚と腸の細胞のみであり、なぜ他の細胞は再生できないのかを分かりやすく教えてください、再生は困難と言われた神経細胞の再生を目指し、パーキンソン病患者へのiPS細胞由来の神経細胞移植の臨床応用のお話、また脳梗塞患者の皮質脊髄路の再構築という大変夢のある研究のお話をされました。淳先生のお話はiPS細胞が自己修復を可能にし、細胞補充による神経回路再構築を可能にしたこと、さらにゲノム治療と遺伝子治療の融合によりさらなる可能性があることをお示しされました。学生向けに自己相似性 fractal という言葉の話をされ



ました。“細胞で起こっていることは個体にも起こり、社会にも起こる、自分の可能性は一つではない。”と学生に語り大変印象に残りました。

雅代先生は学生時代はテニス一筋、35歳までは普通の臨床医であったが35歳から研究の道に目覚めたそうです。ソーク研究所で神経幹細胞を知り、眼科医として臨床をやっていたので網膜移植ができると思い、帰国後笹井先生にES細胞を見せられて網膜移植の研究を行い、iPS細胞でさらに改良され臨床治療を実施されました。雅代先生のお話で印象に残っているのは“誰にもわかってないことの価値をわかってもらうことは大変で、最初は80%は否定、20%が応援である。”と言われたことでした。誰もやっていないことに対して、臨床医と研究医という日本人研究者の強みを生かし綿密に計画をして突き進んできた先生のお話は説得感がありました。日本の医療の問題点、規制に対する疑問を持ち現在の会社の社長となり“社会の仕組みを変える会社”としてビジョンケアを位置づけていることを知りました。

最後に、淳先生が学生に向けて語られたことが非常に印象に残っています。“私たちがこのような業績を残せたのは一人ではなすことができず、いろいろな人の協力が必要であった。しかし、自分一人でもこの山を登っていくという意思をもって登っていくことが重要だ。最初は一人でも自分が登っていくと誰かがついてくる。そして、山の頂上に近づくと別のルートから頂上を目指した人に出会い頂上を目指すことができる。学生さんには是非、一人でも山を登って行ってほしい。”と語られました。学生のみならず、我々教員やすべての人に響いた言葉であり、世界の頂上に近づいているお二人ならではのお言葉と感じました。今回、お忙しいなか徳島に足を運んでいただき直接世界にチャレンジする熱いお話を聞けて、職員、学生、青藍会会員にとって非常に有意義な時間を過ごせました。本当にありがとうございました。

高橋淳先生，高橋政代先生の ご講演を拝聴して

谷川 雅 樹 (医学科3年)

京都大学 IPS 細胞研究所所長である高橋淳先生の講演を聞かせていただきました。未受精卵の状態では様々な細胞に分化できる可能性を秘めているが、分化するとほかの細胞には分化できず、また進化の過程で再生能力を失っていったと考えられました。しかし山中伸弥先生は成熟化細胞でもすべての遺伝子を持っていることに気づき、IPS 細胞を発見されており、高橋先生はそうしてできた自己増殖能、分化能を持つ IPS 細胞を用いて再生医療や創薬に取り組んでおられました。今回はその取り組みの中でもパーキンソン病と脳梗塞についてお話しいただきました。パーキンソン病について、今までは患者自身の細胞に電氣的刺激、薬、遺伝子治療をもちいてやりくりするといった治療が行われていたが、IPS 細胞を用いて細胞を補充することによって新たにドパミンを産生することができる細胞を増やすというものでした。脳梗塞について、脳梗塞の治療は脳から脊髄まで神経細胞が正しく接続しなければ治癒することができないため、IPS 細胞で大脳オルガノイドを誘導することで治癒を試みておられました。高橋淳先生はフラクタル（自己相似性）を意識しておられ、細胞は体の中で、体は社会のなかでといったように世の中で起きていることはサイズを変えて繰り返し起きているといった広い考えを持っていました。私たちを含め、みんな可能性は一つではなく、自由ということも IPS 細胞が教えてくれました。僕もこの先どこかで煮詰まったときにこの言葉、IPS 細胞を思い出してみたいと思いました。次



に株式会社ビジョンケア代表取締役である高橋政代先生のお話を聞かせていただきました。高橋政代先生は世界初に挑戦することについて、誰も価値がわかっていないことを価値があるとわからせることが第一段階だと言っておられ、ES 細胞を用いて網膜再生を試みておられましたが、前例はなく不可能だといわれ続けられたらしいです。ですが、あきらめず研究を続けていたところ、IPS 細胞が発見され今まで継続していた研究に大きなアシストが来たことで現在網膜再生について論文を執筆中とのことでした。今回高橋淳先生、高橋政代先生のお話を聞いてお二人とも第一にスライドが非常に見やすく、また質問にも的確に答えておられ、現在研究室配属のポスター発表を控えている私が自分の研究について本質的な理解を深めるうえでこれ以上ない勉強となりました。またフラクタルという考えや、世界初に挑戦することなど、講演を聞くうえで医学についてだけでなく、今後の人生の指標となるような考えも聞くことができ、非常に楽しい時間となりました。最後になりますが、今回の講演会にご尽力いただきました職員の皆様、先生方、青藍会事務局の皆様へ深く感謝いたします。そしてご多忙の中、貴重なご講演をさせていただいた高橋淳先生、高橋政代先生に心よりお礼申し上げます。



青藍会の助成活動

徳島大学病院卒後臨床研修センターの活動報告

徳島大学病院卒後臨床研修センター長
岩田 貴 (医学部36期)

青藍会の皆様方には、日頃多くの研修医の受け入れやご指導いただき、また徳島大学病院卒後臨床研修センターにご支援を賜り、敬意と共にお礼を申し上げます。大学病院の研修プログラムは、県外の研修病院や地域の診療所など複数の施設で研修経験を積む、襷掛けの研修を特徴としておりますので、県を跨ぐ研修医の移動の制限は今年度からコロナ禍の大きな影響を受けることなく、可能となりました。このような状況下において急な研修プログラムの変更に対しても、受け入れ先の確保や調整に当センター教官やスタッフとともにご尽力いただき、全ての研修医の研修が滞りなく進められていることにも感謝しております。また、院内研修では、初期研修から専門研修につながる基礎知識を得るための教育講座やセミナーの開催を、少人数の個別講習の開催にもかかわらずご準備いただき、たとえば新型コロナウイルス感染拡大によりこれまで中止していた、毎年9月に学生・研修医対象に開催していた「学生・研修医のためのキャリアデザインセミナー」は、昨年12月にオンラインで再開し、多様な領域で活躍している先輩を講師としてお招きして、研修医が講師の先生を囲み直接話をしながら将来像を描いてもらうことができました。本年も12月にオンライン実施予定となりました。今後は徳島県立中央病院と合同で開催し、多くの施設の研修医や医療従事者が参加していた「メディカルゾーンセミナー」なども対面での開催を予定しています。

研修医だけでなく、指導医の養成は当センターの重要な任務のひとつであります。昨年度はオンラインで開催していた徳島県臨床研修指導医養成講習会は対面形式で開催され、講習会の内容は「理想の研修医」からはじまり、「教育的カンファレンス」、現在の評価方法であるPG-EPOCの基本的な考え方であるアウトカム基盤型教育に関する「研修目標の立て方」、地域医療の重要性を参加者で検討するワークショップに加えて研修医制度の現状と今後の展望に関する講演などがあり、指導医として必要な知

識・態度などをワークショップを通じて得ることができました。

このように対面でのセミナーなどが再開され始めた中で、医学部生の病院見学は非常に少ない状況で、1次マッチングのための面接を行いました。応募者は19名と非常に少ない状況で大学病院は苦戦しております。学生のニーズにマッチするように、指導教員が最も多彩で、数も多い本院の強みをしっかりと宣伝しながら、徳島県全体の専門研修医の増加につながることを念頭に置いて協力病院や徳島県と連携を取りながら工夫することが喫緊の課題と考えております。

徳島大学病院の研修プログラムは、本来各協力病院や診療所、施設との連携を密にし、研修医のひとりひとりの要望に答える形で、各病院の特徴を活かした融合研修を進めていました。このような連携研修を通し、徳島県全体で医師を育てる、“All 徳島”での研修環境を構築し、徳島県の若手医師育成と医療の質の向上に寄与するのが本来の目標でしたので、研修医の育成について、もう一度原点に戻り、皆様方と一緒に柔軟に取り組みたいと考えております。

今後とも皆様方には卒後研修に対しご理解と共にご指導・ご支援を賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。



令和5年度徳島県臨床研修指導医養成講習会
(令和5年8月19、20日、徳島大学病院日亜ホールwhite)

留 学 記

大 山 拓 朗 堺 亜 紀
関 根 礼 乃 竹 原 優

マインドセットは人それぞれ

徳島大学大学院医歯薬学研究部
麻酔・疼痛治療医学分野 助教

大 山 拓 朗 (医学部56期)

・はじめに

私はアメリカの文化に興味がありぼんやりではありますが留学したいと思っていました。しかし、研究に対する明確な志がない上に多額の費用を捻出してまで留学する意味はあるのだろうかとも思っていました。そのような自分の留学体験記をお伝えしたいと思います。

・留学までの流れ

留学するまで海外で生活した経験はなく、英語の知識も大学受験の頃がピークでした。

2010年に徳島大学を卒業後、都立駒込病院で初期研修医として研鑽させていただく中で、熱帯感染症に興味があり、海外志向の強い同期に出会いました。彼は研修終了後、イタリアへ留学しました。帰国した彼の体験を聞いたことで燃っていた留学への興味が再び湧いてきました。2018年に初めてアメリカの学会で発表する機会があり、NBA 観戦の夢（私はスラムダンク世代です）も叶い、留学への気持ちはさらに高まりました。正直、学術的な志はそれほど高くありませんでした。

・留学先の選定

多くの先生は、明確な目的を持って、海外の研究室のテーマを自ら調べた上で留学先を選定すると思います。幸運なことに私は田中克哉教授と親交のある先生の研究室で研鑽を積む機会を与えていただきました。2019年に面接のためナッシュビルのVanderbilt 大学を訪問し、留学後の生活をイメージすることができました。

・COVID-19

留学へのカウントダウンが始まるかと思った矢先、世界中でCOVID-19が猛威を振るい始め、留学計画は頓挫しました。パンデミックが一向に収束しな



かった時期は留学を諦めかけました。また、晴れて留学できることが決まってからもDS-2019というアメリカ入国に不可欠な文書が先方からなかなか届かずビザの取得に時間がかかったりもしましたがなんとか渡米することができました。

・渡米後

2週間毎にミーティング（今後の研究計画や学会参加予定などを共有する）がありました。私は出血性ショックモデルラットを用いた実験に着手することとなりましたが、数ヶ月は実験開始前のカンニュレーション中に絶命させてしまうばかりで全くうまくいかず毎日自分の無力さに絶望していました。事前の研究計画や明確な研究の志もなく渡航した私にとって、この時期はとても辛かったです。徐々にプロトコルをこなせるようになり、だいぶ気持ちが楽になりました。もちろんその後も失敗した症例は多いですが、成功した症例もあったので失敗を糧にして研究に取り組むことができ、いくつかの海外学会で発表できました。

・研究に対する熱意や志が中途半端な中、留学する意味はあるのか？

マインドセットは人それぞれであり、正直、何が正解なのかはわかりませんが、全く異なる環境で研究・生活することは非常に刺激的でした。何より日本では得られない経験が得られ、留学した意味はあったと思います。海外留学を悩んでいる先生がいるのであれば、軍資金を準備した上でぜひ挑戦してほしいです。

最後になりましたが、海外留学に快く送り出してくださった田中克哉教授をはじめ麻酔科の先生方、また各種手続きに協力してくださった医局秘書の方々、休職を許可してくださった徳島大学には感謝しかありません。本当にありがとうございました。



ドイツの学会にて

イギリス・ドイツでの留学を通して

堺 亜紀（医学科6年）

2023年の3月と6月に1か月ずつ、イギリスとドイツにて臨床実習をさせていただきました。私は、在日外国人を含む日本に住むすべての人々のために医療を行う医師になりたいと考えています。移民・難民といった、言語的・経済的な問題等により、病院に行きたくても行けない人々が存在することを知る機会があり、将来は医療通訳制度の普及に尽力し、自身もやさしい日本語と英語で診察を行うことを目指しています。欧州において移民を多く受け入れるイギリスとドイツにおいて、多様化した背景を持つ患者をどのように診療しているのか学生の間に経験しておきたいと思い、今回の留学に申し込みました。

5年次の3月に、医学教育振興財団のプログラムに参加し、イギリスのニューキャッスル大学で臨床実習を行いました。消化器外科と産婦人科、感染症内科を回り、1人で英語で問診や身体診察、採血などをすることができました。1日だけではありますが、家庭医を訪れる機会もいただき、地域の健康づくりについてお話を聞くことができました。その診療所では地域でボランティアを募り、テニスや卓球、ガーデニングなど住民が定期的に参加できるイベントを行っているそうです。こうした取り組みは、生活習慣の改善だけでなく、独居の高齢者が地域住民との繋がりを作る機会にもなるのではないかと感じました。

また、医療通訳の現場を対面と電話で見ることができました。NHSの電話通訳は約50言語に対応しており、費用は無料です。外来では予約表に患者の氏名やIDと並んで通訳が必要かどうか記載されてお

り、通訳の需要の多さを感じました。日本では医療通訳は限られた病院でのみ利用可能で、国主導のシステムではないため、提供できる言語に偏りがあり、費用の面で患者負担・病院負担が発生することも少なくありません。「年齢・性別・人種・宗教など利用者の背景に関係なく誰でも利用できること」を理念に掲げるNHSが非常に優れたシステムであると感じた一方で、NHSの問題点も見えてきました。ここ数十年で専門医受診までの時間や救急外来での待ち時間はうなぎのぼりに増加しています。また、人手不足による業務の増加と物価上昇に相反し、医療従事者の給料は下落の一途を辿り、医師のストライキが起こるなど、混乱は今も続いています。

6年次の6月には徳島大学の協定校であるドイツのハノーバー医科大学の形成外科で実習をさせていただきました。形成外科専用の3つの手術室で毎日合計6～9件の予定手術があり、外傷や火傷に対する日中の緊急手術に加え、夜間当直帯にも每晚3件程の手術が行われており、毎日術野での見学や第一助手をさせていただきました。最後に入った手術ではなんとかドイツ語だけで会話することができました。実習とは離れますが、休日に観光に出かけた際、駅のホームで受傷された日本人の旅行者の方の医療通訳をさせていただきました。救急車に乗って救急外来での診察に付き添い、役に立つことができとても嬉しかったと同時に、自身の語学力の不足さを痛感しました。また、医療通訳者の役割として、質の高い言葉の通訳だけでなく、医療制度の説明や異国の地での不安を軽減することも重要であると、身をもって感じました。

最後になりましたが、実りある留学の機会を与えてくださった関係者の皆様に、厚く御礼申し上げます。



ハノーバー医科大学形成外科学の皆様と

タイランパン病院留学記

竹原 優（医学科4年）

医学部医学科4年の竹原優と申します。この度はこのような機会をいただきありがとうございます。この夏私は、タイの北部に位置するランパン病院にて見学実習を行わせていただきました。今回はその留学報告をさせていただきます。ランパン病院への見学実習は公募の見学実習であり、自身で申し込み、実施まで至りました。夏休みを利用してランパンに見学実習に行った理由としましては、将来進みたい診療科の一つに救急があること、単なる見学だけでなく、ある程度の手技をタイの先生の責任のもと行わせていただけるということ、将来的に海外での臨床留学も考えているため、共通言語として英語を用いて医療に触れる機会を作りたいという思いがあったためです。現地についてはランパン病院の救急科の部長をされているタニン先生に付き添う形で現場の見学実習をさせていただきました。また、ランパンに2年間留学に来られていた旭川医科大学の心臓血管外科の潮田先生にお世話になりました。

救急（ER）での見学実習の内容については、救急現場を体験しながら、超音波検査に関して実際の手技を学ぶというものでした。人によっては、タイミングが合えば気管挿管などの手技も行わせていただけるようでした。初日は模型を用いて超音波検査の練習を行い、一定の基準を満たせるようになった翌日から実際に患者さんに対して超音波検査を行わせていただきました。学生が超音波検査を行う前は必ずタニン先生が患者さんに対してタイ語で説明を

してくださり、超音波検査を行った後はタニン先生が必ず再度超音波検査を行ってくださるため、安心して検査に臨むことができました。また、超音波検査で異常を見つける機会もいくつかあり、座学で学んでいる内容と実臨床が有機的につながるのを感じ、非常に勉強になりました。コミュニケーションに関しても事前に聞いていたように先生方は英語でのコミュニケーションが可能であるので、大きく苦勞することはありませんでした。基本的にタニン先生のシフトに合わせての見学実習だったため、先生が休みの日はランパンの観光に連れて行ってくださり、充実した日々を過ごさせていただきました。

ランパンで約1週間の実習を経験して、たくさんのことを学ぶことができました。実際の救急の現場を経験できたこと、期間は短くも技能的に上達できたこと、そして共通言語としての英語の重要性に改めて気付かされました。これまで以上に4年次での学びを深めるとともに、英語で医療のコミュニケーションを取れるように学び・実践していけるよう残りの学生生活を過ごしていきたいと思いました。

上記の他にもタイの医療制度についても教えていただくことができ、日本の医療とタイの医療、双方における課題を考えさせられる機会になりました。

また、何よりも言葉、文化が全く違う環境で、医学生として医療に関わることができたことは非常に貴重な経験となりました。

最後になりますが、留学するにあたって推薦状を書いてくださった赤池教授をはじめさまざまな人の支えのおかげで今回の留学が実現しました。この場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。



ランパン病院



西医体女子ゴルフ団体戦メンバー
左から 4年 岡本香梨 2年 森田彩夏 1年 竹内百佳 5年 利川杏菜

このメンバーで西医体初優勝という素晴らしい成果を収めることができ、大変嬉しく思っています。本当にありがとうございました。

竹内百佳（医学科1年）

今回西医体に出場し、先輩方の秀でた成績で優勝することが出来ました。大会では色々な大学の選手たちと交流でき、刺激的でいい機会になりました。初めてのことばかりで緊張していましたが、先輩方が支えて下さりいい結果を残すことが出来たと思います。応援していただきありがとうございました。これからも練習に励みさらに上手くなっていきます。

西日本医科学生総合体育大会を終えて

ゴルフ部

森田彩夏（医学科2年）

8月1日（火）に大阪府のアートレイクゴルフ倶楽部において行われた第75回西日本医科学生総合体育大会ゴルフ競技女子個人戦に出場し、優勝という成績を収めることができました。私はこの大会に出ることが大学入学当初からの目標であり、3アンダーというスコアをもって優勝という結果を残せたことを大変嬉しく思っています。

今回の西日本医科学生総合体育大会は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、2019年に開催されて以来4年ぶりの開催となりました。昨年度の大会

第75回西日本医科学生総合体育大会の結果

今大会はコロナウイルスの影響により4年ぶりの開催となりました。弓道部門では当初主管校の運営状況から開催が危ぶまれており、一時は中止の可能性もありました。しかし主管校をはじめとして、西日本の各大学が主管及び運営を協力するという形で対面での開催をすることが可能となりました。ここに至るまで様々な話し合い等がありましたが西日本の学生が一堂に会し、競い合い、交流し合えたことは何事にも変えがたい経験になったと思います。

西医体での優勝、入賞は部員全員の悲願であり、常に目標としてきました。しかしこの3年は大会が開催されておらず、私たちは大きな会場で大歓声のなか引くことに思いを馳せてきました。本大会もその意気のまま臨んだところ実際の会場ではどの大学も本調子というわけではなく、全員が何かに飲まれたような苦しい雰囲気の中大会が進んでいました。私たちも例外ではなく、始めは決していい調子であったとはいえない状況で、久しぶりの大舞台の洗礼を浴びたような気がしていました。しかしその流れを変えたのは日々の練習の成果と声援であった

と思います。辛いときにこそ地力が出るように日々の練習が自信となり、部員一同で高め合った結果調子が上がっていき、良い結果を得ることができました。これはひとえに日々の活動を支えてくださっているOBOGの先生方をはじめとするすべての方々の応援のおかげであります。本当にありがとうございます。

また徳島大学は西医体の結果、上位4校が進める全日本医科学生体育大会王座決定戦に参加できることとなりました。これは大変名誉なことであり、更なる飛躍の場になると考えております。ここ数年対面での試合、大会や活動などが十分できなかった中でもこのような結果を残すことができ、伝統ある部活動であること、人と人とのつながりが大切であることを実感しています。今後はより一層活動の幅が広がっていくことと思いますので、今後とも暖かいご支援いただけましたら幸いです。

最後になりますが改めましてこのような報告の場を設けていただき感謝申し上げます。ありがとうございました。



西医体女子団体メンバー 左から
4年 田嶋藍 5年 西岡朋可 4年 末永あおい 3年 中尾天音 3年 齋藤瑛美里

学生だより

本篇は、青藍会学生広報委員の磯村勇斗さん、加藤胡都菜さんに企画・作成していただきました。

青藍会学生広報委員企画

アフターコロナへの転換と学生生活の変化

青藍会学生広報委員

磯村 勇斗 (医学科3年)

この度青藍会第102号記念に学生代表として企画を任せていただきました。医学科3年の磯村勇斗と申します。徳島大学青藍会の学生広報委員として、アフターコロナにおける徳島大学での出来事や学生の思いを伝えることができ誠に光栄です。

まず、今年度の徳島大学の授業や出来事について、簡単に述べさせていただきたいと思いますので、最後までお付き合いいただければ幸いです。

昨年までは多くの講義がオンラインで行われていたのに対し、今年度に入り対面講義が主体となってきております。私自身としては、3年生になってほとんど初めての大学対面講義を経験いたしました。朝起きるのは少し大変ですが、実際に面と向かって講義を受けることで、学びに対する意識も上がってきているのを実感しております。

また、コロナウイルスの影響が徐々に緩和されてきている中で、喜ばしいことに西医体を始めとした多くの学校行事が再開されることとなりました。私自身の所属している部活でも、リーグ戦が開かれることとなり、仲間と大変充実した日々を送ることができております。同じ目標に向かって仲間と切磋琢磨し合い、話し合うことは私自身をより成長させてくれているのを実感しております。

青藍会学生広報委員として、各部活の主将などにアフターコロナの取り組みについて話を聞いていこうと思いますので、すでに卒業された先輩方はもちろん在校生にも楽しんでいただけたらと思います。

リーグ戦を終えて

医歯薬硬式野球部主将

山本 療 矢 (医学科3年)

皆様はじめまして。2023年6月から2024年5月まで医歯薬硬式野球部主将を務めます山本療矢と申します。

まずは、このような素晴らしい青藍会会誌を永く続けてこられた関係者の皆様に感謝申し上げます。此の度は、学生と徳島大学のOB・OGの皆さまとをつなぐ冊子にしたいという思いを受け、一部活動生として、今回の秋季大学野球リーグ戦についての率直な思いを書かせていただきます。

まず、コロナウイルスによる影響が緩和されたことにより大会参加が決定したとき、嬉しさの反面、不安が大きかったことを覚えています。1日に2度行われる試合を乗り越えることができるかどうかだけでなく、主管校としてグラウンドの予約や審判さんの招集など、私達にとって初めて行うことが非常に多かったことが理由です。他の参加チームにも助けられながら、一人も怪我することなく無事リーグ戦を終えられたことをとても嬉しく思っています。OB・OGの皆様を始めとした多くの周りの方々の助けによって、大きく成長することができたと実感しております。本当に多くのご声援ありがとうございました。

秋季リーグ戦を通して、チームの一体感が高まり、一人ひとりがチームのために何をすべきか考えるようになりました。リーグ戦に向けての準備、競技に臨む心意気、試合の中で行われる1対1の攻防、全てが私達の部活に大きな経験をもたらしてくれたと感じております。これからも、試行錯誤を続けながら、必死に取り組んでまいりますので、引き続き、皆様のご支援ご指導のほどよろしくお願い致します。

アフターコロナの蔵本祭

阿部 愛美 (医学科3年)

10月21日・22日に「第39回蔵本祭～時には起こせよ movement～」が開催されました。今年の蔵本祭は、新型コロナウイルス感染症の社会的影響も弱まり4年ぶりに一般公開で行われました。実行委員長を務めた医学科3年の有本啓孝さんは、「飲食の模擬店解禁や芸能イベント・学部展の復活を実現させることができ、アフターコロナという、時代の大きな転換点に立っているなど感じております。一般の方々も多く来場して下さり、『蔵本祭をずっと楽しみにしていた』という声をかけてくださった方もいました。恥ずかしながら、私はその言葉を受けて初めて、蔵本祭は学生だけではなく地域住民の方のためにもあるべきだと真に受け止めました。来場者数は3000人を超え、大盛況に終わった蔵本祭。このような形で徳島大学や地域に貢献できたことを誇りに感じております。」と語ってくれました。

また、大きな盛り上がりを見せたステージ企画では、私が3年前に創設した蔵本ダンスサークルnabiが初めてのステージを披露させていただきました。コロナ禍真っ只中のメンバー集めから始まり、練習場所の確保、曲構成など、様々な困難がありました。しかし、本番ステージ上から観客の方々の楽しんでくださっている姿を見て、大きな達成感を味わうことが出来ました。その他にも、軽音部のライブ、部活動ごとの模擬店、蔵本祭実行委員会など、多くの学生が蔵本祭のために何ヶ月もかけて仲間と一緒に準備を行い、成功を収めることができました。4年生以下はコロナ前の蔵本祭を全く知らず、自分たちで一から作り上げた部分もありましたが、仲間と協力し助け合うことで、テーマ通り、蔵本祭を通



第39回蔵本祭 実行委員会

して学内にそして地域に“大きな波”を起こすことができましたと感じました。

新型コロナウイルス感染症の影響で制限されていた分、蔵本祭をはじめとした、部活動や様々な課外活動などにおいて、これまで先輩方が受け継いでこられた伝統を継承するとともに、さらに盛り上げ、発展させていきたいと考えております。

コロナ禍の学生生活を経て

青藍会学生広報委員

加藤 胡都菜 (医学科3年)

今回は青藍会会報に学生企画として、コロナ禍・コロナ後の学生の生活の様子を少しお届けしたいと思います。コロナ禍に大学生になり、コロナが落ち着いてきた今、これまでの生活を振り返ってどんなことを思ってきたのか、私の3人の友人に聞いてみました。最初の2年間をコロナの制約の中で過ごした学生たちのリアルな声をお聞きください。

Q1 コロナ前後で生活面にどんな変化がありましたか？

- Eさん 外出時のマスク着用と帰宅時の手洗いうがいが習慣になりました！でも、旅行とかには行きづらくなりました…
- Sさん 過ごす場所が家中心の生活から大学中心の生活になりました。
- Cさん コロナ前を知らないのでもなんとも言えませんが、対面授業もサークルもなく、人と会わなくなりました。一日中一言も喋らない日もありました。



蔵本ダンスサークルnabi ステージの様子

たけのこ連活動再開

たけのこ連復活への想い

原 風 花（医学科4年）

まず初めに、たけのこ連活動再開にご協力いただきました先輩方やOB・OGの皆様、そして応援していただきました卒業生や学校関係者の皆様に、この場をお借りして感謝の意を表させていただきます。

私は徳島県出身であり、阿波おどりという徳島県の伝統文化に、心の底から誇りを感じています。約400年もの歴史を持ち、日本中、さらには世界中の人々を、言葉や文化といった垣根を越え、心で繋げてくれる力を持つのが阿波おどりです。渋谷に負けない4日間という言葉をよく耳にしますが、本当にその通りで、人と人がとにかくカオスに交わり合い、阿波おどりに参加している間だけは、現実世界の悩みも問題もすべて忘れ、目の前の人とただ純粹に心の高揚感を楽しむことができます。そんな阿波おどりを、大学生という最も出会いに溢れる自由な期間に、大学連として楽しむことを、入学当初から楽しみにしていました。個人的な見解になってしましますが、私は、人がより自由に自分のやりたいことをして生きるためにはより多くの選択肢を知ることが必要で、田舎であればあるほど、人に選択肢をもたらしてくれるものは「出会い」であると考えています。そして、自分たちの将来について真剣に考える大学生の期間こそ、勉強だけでなく、とにかく多くの出会いを経験し、成功も失敗も重ねながら自分の価値観を広げるとともに、将来語れるくらいの濃い大学生活を送るべきであると考えています。しかし、入学と同時に訪れたコロナ禍により、阿波おどりへの参加はもちろん、ありとあらゆる出会いの機会が失われるという現実と直面しました。毎年夏になると、今年も中止か、一体いつになればこれまでの生活に戻れる

ののだろうか、と悲しさと寂しさを感じながら、気がつけば大学4年生になっていました。長らく大学生生活を蝕んできたコロナもついに収束に向かっており、今年こそはたけのこ連として大学の仲間と共に踊りたい、そして、大学生に対し1つでも出会いの機会を作りたいという想いのもと、3年ぶりにたけのこ連を復活させることを決心しました。しかし、3年という期間は想像以上に長く、ひとことで復活といっても、簡単にはいかないことばかりでした。既に卒業されているOB・OGの先輩方から引継ぎをしていただいたり、練習をみていただいたり、何度も質問に答えていただいたりしながら、なんとか形にすることができました。ご協力いただいた先輩方には、本当に感謝しています。また、何も詳細について伝えることができず得体の知れない中、協力するよ、やってみたい、と復活に手を貸してくれた同期や後輩、当日参加してくれた皆様、改めてありがとうございました。

最後になりますが、たけのこ連がこれまでの伝統を引き継ぎながら、誰もにとって出会いに溢れ心躍るような場所として発展し続けることを祈っております。



たけのこ連2023
8月12日参加者の集合写真です。

青藍会の動き

教授就任のご挨拶



東京医科大学心臓血管外科主任教授

島原 佑介 (しまはら ゆうすけ)

昭和51年9月20日生

略 歴

平成13年3月	徳島大学医学部医学科卒業
平成13年5月	徳島大学医学部附属病院外科研修
平成15年4月	徳島県立中央病院外科研修
平成16年5月	国立循環器病研究センター心臓血管外科レジデント
平成19年4月	同上 シニアレジデント
平成19年10月	同上 医師
平成31年1月	国立循環器病研究センター心臓血管外科医長
平成31年3月	東北大学医学系研究科医科学専攻博士課程修了
令和2年7月	東京医科大学心臓血管外科学分野講師
令和4年11月	同上 准教授
令和5年4月	同上 主任教授 (現在に至る)

就任のご挨拶

東京医科大学心臓血管外科主任教授

島原 佑介 (医学部47期)

2023年4月1日付で東京医科大学心臓血管外科主任教授を拝命致しました島原佑介と申します。私は学生の頃、荒瀬誠治青藍会会長が部長を務めていたサッカー部に所属しておりました。当時の時代背景もあって、学生の頃はサッカーと筋トレばかりしていましたが、外科に興味があり、整形外科、脳外科を考えていました。しかし、心臓血管外科の手術を体験し、ダイナミックに動いている臓器を扱うことに楽しさと魅力を感じた結果、心臓血管外科教室(当時北川哲也教授)に入局させていただきました。徳島で外科研修を行った後に、大阪の国立循環器病研究センター(国循)で心臓血管外科としてのキャリアをスタートさせていただき、非常に多くの先生方から手術および研究、教育の基本から応用まで幅広く学ぶことができました。現徳島大学心臓血管外科教授である秦弘樹先生にも私の専門分野である成人心臓手術についてご指導いただきました。国循の連携大学院であった東北大学で学位をいただいた後に、東京医科大学の前心臓血管外科主任教授の荻野均先生より誘いを受け、さらなる成長を目指して2020年7月に東京医科大学に赴任しました。東京医科大学は1990年代より他に先駆けてステントグラフト内挿術という血管内治療において実績をあげましたが、ここ約10年間では開胸による成人心臓大血管手術についても実績をあげてきました。東京医科大学でも様々な先生からご指導いただき、縁があって、私が7代目の主任教授として医局運営に携わることになりました。前医局の良いところを引き継ぎながら、医局員と密に連携しつつ共に研鑽し、成長を実感できる教室を目指します。

最後に青藍会の皆様のご発展をお祈り申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。今後ともご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

病院長就任のご挨拶

ご挨拶

徳島市民病院院長

中野俊次（医学部33期）



令和5年4月に徳島市民病院院長を拝命いたしました。青藍会の皆さまに謹んでご挨拶申し上げます。私は1987年に徳島大学医学部を卒業後、同大学整形外科教室に入局して関連病院で7年間ほど臨床経験を積みました。1995年から12年間、同大学で勤務、2008年に当院に赴任しました。

95年の歴史を有する徳島市民病院は、地域医療を支える335病床を有する中核病院で、主に急性期医療を担い、地域周産期母子医療、関節治療、がんの3つのセンターを設置しています。救急医療体制の強化とともに高度医療の充実も不可欠であり、全国的に患者ニーズの高まる無痛分娩、関節手術のロボットアーム手術支援システム、手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ」の導入など様々な取り組みを進めています。また、多くのスタッフがプライドを持ち働きやすいと思えて、誰からも信頼される病院を目指しています。

私は赴任後15年間、整形外科を中心に頑張ってきたつもりですが、これからの3年間は病院全体をより良くするために全力を尽くす覚悟です。2024年からの医師の働き方改革をはじめ、喫緊の課題が山積しており、粛々と対応していく所存です。病院長として駆け出しですが、どうか青藍会の皆さまには、引き続きご指導・ご協力をお願い申し上げます。

ご挨拶

国立病院機構徳島病院院長

近藤秀治（医学部40期）



令和5年4月1日より橋口修二前院長の後任として国立病院機構徳島病院院長を拝命いたしました近藤秀治です。青藍会の皆様、よろしくお願い申し上げます。

徳島病院は、昭和14年に傷痍軍人徳島療養所として創立され、昭和39年に筋ジストロフィー病棟を開棟し、神経筋疾患を中心とした医療を提供して参りました。現在も四国神経・筋センターとして中心的役割を果たし、徳島県難病診療分野別拠点病院と徳島県災害医療支援病院の指定を受けています。

令和5年度には「ポストNICU」機能を東徳島医療センターへ移し、神経筋疾患の診療を中心とした病棟再編を行い運営の効率化を推進しています。今後も、国立病院機構が提供する政策医療として、神経筋疾患・難病の患者様に「安全かつ良質な医療」を提供できるよう努めて参ります。

人口減少社会が進み、当院を取り巻く環境に対応しながらも、これまで培ってきた歴史・伝統を礎に、当院のもつ機能を徳島県に残せるよう取り組んでいきたいと思っております。青藍会の皆様には、引き続きご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

投稿規定

広報委員会

○ 原稿について

- 必ず、文頭にタイトル、氏名・卒業期をご記載ください。
例 タイトル ○○○○○○ 山田太郎 (医学部○期)
- 文字数は1,400字以内、写真（カラー）は1枚でお願いいたします。
なお、写真には見出しあるいは説明文を必ずつけてください。
- 英数字は半角文字で、カタカナは全角文字で入力してください。
- 原稿の文中に登場する氏名及び敬称については、スペースを入れずに記載してください。
(例 山田太郎君 高倉健さん 松下幸之助先生)

○ 原稿及び写真の送付について（青藍会事務局 seiran@tokushima-u.ac.jp）

- 原稿送付は、可能な限りメール添付または電子媒体にてお送りください。
プリントされた写真については、郵送にてお送りください。後日、返送いたします。
- 画像ファイルを送付される場合は、原稿とは別に、JPEG ファイル等でお送りください。
原稿（Word 等）に貼り付けますと、画質が悪くなります。
なお、画像ファイルの容量が大き過ぎますと届かないことがございます。容量を小さくして1枚ずつに分けてお送りください。また、青藍会事務局からの連絡がなかった場合は、届いていないことが考えられますので、再度確認のご連絡をお願いいたします。

○ 原稿の締め切り日を厳守願います（次号103号の締め切り日は令和6年3月29日（金）です）

会報の印刷および製本には、原稿をお預かりした後、ゲラ刷り作成、校正、修正、編集会議等で2ヶ月ほどの時間を必要といたします。

締め切り日より遅れた場合は、次号の掲載になりますので予めご了承ください。

○ 編集作業について

- お送りいただきました原稿は語句などに関して広報委員会で校閲させていただきます。その結果、修正をお願いする場合もございますことをご了承おきください。
- 用語や表記などの統一のために文章に手を入れることがございます。予めご了承ください。

○ 原稿校正について

- 広報委員会で会報全頁のレイアウト等を校正後、製本前のゲラ刷りを作成しお送りさせていただきますので、著者校正をお願いいたします。
- 校正時の大幅な追記、削除等は、会報発行期日に影響いたしますので、ご遠慮くださいますようよろしくお願い申し上げます。

編集後記

今年は徳島大学医学部創立80周年という記念すべき年でした。今回の会報にも、素晴らしい医師人生を歩まれている先生方のことが記されました。高い志を持ち、患者や難病に真摯に向き合われている姿に深く感銘を受け、長い歴史を刻んだ徳島大学医学部の同窓生として恥ずかしくない自分でいなければと、我が襟を正しました。

学生だよりを拝見して、医学科学生の皆さんの頼もしい様子に未来は明るい、とても嬉しく思いました。コロナ禍で対面授業もままならず、友人とも会えず、数々の行事も中止となった中でも、しなやかに順応されて学生生活を送られており、また、国試合格率100%を成し遂げ、若いうて素晴らしい！と思いました。国際的な視野を持ち、海外に留学する学生さんが多いことにも感心します。これからの医療国際交流のリーダーとなってくれることでしょうか。今年5月にコロナが5類感染症になってからは様々な行事が再開されており、西医体、蔵本祭、阿波踊りと、存分に学生生活を楽しんでほしいと思います。

会員通信では、たくさんの楽しい同窓会の報告があり、ほほえましく拝見しました。やはり同級生は一生ものだと思います。学生の皆さんや若い先生方にも青藍会の活動や良さを知っていただき、この共同体の中で、生涯交流を続けていただきたいと思います。

工 藤 美千代 (医学部33期)

編集 広報委員 橋本 一郎 (34期) 大塚 秀樹 (40期) 工藤美千代 (33期) 高橋 浩子 (34期)
田中 克哉 (36期) 板東 浩 (27期) 森岡 久尚 (45期)
学生委員 磯村 勇斗 (医学科3年) 加藤胡都菜 (医学科3年)

非 売 品

青藍会会報第102号

令和5年12月4日印刷
令和5年12月11日発行

発行 徳島大学医学部医学科同窓会青藍会
〒770-8503 徳島市蔵本町3丁目18-15
電話 (088) 633-7109 (内線2601)
FAX (088) 633-3180 (青藍会事務室)
E-Mail seiran@tokushima-u.ac.jp
URL <https://www.seirankai-tokushima.jp/>
振替 01680-4-8671
ゆうちょ銀行 一六九店 (169)
当座 0008671 青藍会

発行者 青藍会会長 荒瀬 誠 治

印刷所 グランド印刷株式会社
徳島市万代町6丁目20-15 電話 (088) 622-8448
